

# Miss Lonelyhearts 論

—無垢の終焉—

今井夏彦

Nathanael West (1903-1940) の *Miss Lonelyhearts* (1933) は、T. S. Eliot の *The Waste Land* のアメリカ版といえよう。ウェストは、この作品では、不気味なまでのイメージ群を羅列し、シュールレアリスティックな手法を用い、“荒地”を下敷きにすることによって、悲惨なまでの当時のアメリカの現実を、みごとに逆照射している。そしてその描写は、そのまま現在の我々のもつ普遍的不条理を具現している、ということができる。

*Miss Lonelyhearts* (以下 Miss L. とする) は、The New York Post-Dispatch という新聞の「人生相談」欄の回答者であり、小説は、“Miss Lonelyhearts, help me, help me” から “Miss Lonelyhearts has a religious experience” までの、比較的短い15章で構成されている。

Miss L. は、最初ほんの軽い冗談のつもりで担当を引き受けたが、数ヶ月たつうちに、毎日彼の元に届けられる同じような苦悩の手紙に、今度は彼自身が悩むことになる。

“Perhaps I can make you understand. Let's start from the beginning. A man is hired to give advice to the readers of a newspaper. The job is a circulation stunt and the whole staff considers it a joke. He welcomes the job, for it might lead to a gossip column, and anyway he's tired of being a leg man. He too considers the job a joke, but after several months at it, the joke begins to escape him. He sees that a majority of the letters are profoundly humble pleas for moral and spiritual advice, that they are inarticulate expressions of genuine suffering. He also discovers that his correspondents take him seriously. For the first time in his life, he is forced to examine the values by which he lives. This examination shows

him that he is the victim of the joke and not its perpetrator.”<sup>(1)</sup>

Miss L. は、読者からの真剣な手紙によって、生まれて初めて、逆に自らの人生の価値基準を考えさせられることになったのである。彼は、以後それから逃がられなくなり、犠牲者としての最期をとげる。

だが、ここで重要なのはそのような「時代」の是非ではない。それは、あくまで結果論にすぎない。彼のような situation に立たされた場合に、ひとほどのような行動をとるか、ということが問題なのだ。その意味では、Miss L. の徹底的につき合い続けた態度は、称讃に価しよう。だが、その報酬が「死」しかないこと、そこに二重の意味でのウェストの叫びが伝わってくるような気がする。そして、Miss L. の本名が最後まで証かされていないことは、誰でもがその裁きの「場」に立たされる可能性を示している。考え方によっては、この小説はじつに倫理的な作品なのだ。また、それがこの小説の唯一の救いでもある。

それでは、主人公の容貌を見てみよう。

Although his cheap clothes had too much style, he still looked like the son of a Baptist minister. A beard would become him, would acceny his Old-Testament look. But even without a beard no one could fail to recognize the New England puritan. His forehead was high and narrow. His nose was long and fleshless. His bony chin was shaped and cleft like a hoof. (p.5)

彼は、「バプティスト派牧師の息子」のようであり、「ひげがあれば、さらにその旧約的な趣を強め、」しかし、「ひげがなくても、ニュー・イングランドの清教徒と思わないものはない」ような表情をしている。

Miss L. の表情は、James F. Light によると、

The boniness connotes the man of spirit rather than flesh. The

---

cleft chin indicates the split between the spirit and the flesh, between the spli cleft chin indicates the split between the spirit and the flesh, between the devil and the saint. This opposition creates barriers to the Christ dream, and they crop up at every milestone of the spiritual journey.<sup>(2)</sup>

「身体が骨ばっていることは、肉体ではなくむしろ精神で生きる男を示す。割れたアゴは、精神と肉体、そして悪魔と聖者のあいだの相剋を表している。この両者の対立が〈キリストの夢〉の障害になり、それらが彼の精神遍歴のことごとくに現れてくる。」

と、なる。この the Christ dream が、究極的には彼の命とりになってしまふのである。

Miss L. を the Christ dream そして the Christ complex へと追いつめたのは、新聞社の上司 Shrike である。<sup>(3)</sup>

“Jesus Christ is your only sweetheart, eh ?” (p. 10)

いつも殆ど表情を変えないシュライク (the dead pan) にさそわれ、もぐり酒場で飲んだ後、Miss L. はアパートへ帰る。

Miss Lonelyhearts went home in a taxi. He lived by himself in a room that was as full of shadows as an old steel engraving. It held a bed, a table and two chairs. The walls were bare except for an ivory Christ that hung opposite the foot of the bed. He had removed the figure from the cross to which it had been fastened and had nailed it to the wall with large spikes. But the desired effect had not been obtained. Instead of writhing, the Christ remained calmly decorative. (p. 14)

部屋の壁には、象牙のキリストの像がかかっている。彼はそれを、十字架からはがして釘で壁に打ちつけていた。「しかし、期待していた効果は得られなかった。キリストは、身をよじって苦しまずに、いぜんとしてお

だやかな装飾品のままだった。」

Miss L. は、無残にも十字架を奪われ、壁に打ち込まれたキリストの苦しむ姿を予想していた。キリストが苦しめば、それによって、Miss L. の意識の中のキリストも苦悶し、そこから何かが生じてくるだろうと。おそらくは自嘲もこめて。しかしキリストに変化は見られず、そのことは彼にとってはおかえて辛いことだったにちがいない。

つまり、この時点では彼はまだ、キリストを手段として用いているだけである。それでは、salvation にはほど遠いといわなければならない。したがって、彼の脳裡に浮かぶのは、次のような幻覚でしかない。

He knew now what this thing was—hysteria, a snake whose scales are tiny mirrors in which the dead world takes on a semblance of life. And how dead the world is...a world of doorknobs. He wondered if hysteria were really too steep a price to pay for bringing it to life.

For him, Christ was the most natural of excitements. Fixing his eyes on the image that hung on the wall, he began to chant: “Christ, Christ, Jesus Christ. Christ, Christ, Jesus Christ.” But the moment the snake started to uncoil in his brain, he became frightened and closed his eyes. (p. 15)

「蛇のウロコが小さな鏡になっていて、そこには生を装った死んだ世界が映し出されている。」そして、それは「doorknobsの世界」である。この世界がそのような荒廃した姿をとっているとすれば、ドアノブのついた鏡の向う側の世界はどうなのだろうか。そのドアノブを回して入る別の世界は、果たして「死」の世界なのか。そして、そこに「再生」への道はあるのか。「救い」はもたらされるのか。

Miss L. にとって、キリストは「一種の興奮剤」のようなものにすぎない。彼がキリストの名を唱え始めると、その蛇が動き出し、彼は「恐くなって、眼を閉じ」る。

夢の中で、彼は、満員の劇場のステージの上でドアノブによる手品を行っている。ドアノブは、「彼の命令によって血を流し、花を咲かせ、

口をきいたり」する。

おそらく、doorknobs のイメージはキリストでもあろう。キリストの血 (the Blood of the Lamb) によって洗い清められ、花が咲く可能性は残されているのだろうか。それは、doorknobs を操る Miss L. に委ねられている。

夢の後半部では、彼は二人の同僚と大学の寄宿舎で夜明けまで神の存在について議論を闘わし、ウィスキーがなくなってブランデーを求めに市場に出かける。酒を買ってぶらついていると、羊が目に入り、それを買って神に捧げてから食べようということになる。羊を岩の上におさえつけ、キリストの名をとなえて Miss L. が切ろうとするが、うまくゆかずに羊はやぶの中に逃げこんでしまう。

As the bright sun outlined the altar rock with narrow shadows, the scene appeared to gather itself for some new violence. They bolted. Down the hill they fled until they reached the meadow, where they fell exhausted in the tall grass.

After some time had passed, Miss Lonelyhearts begged them to go back and put the lamb out of its misery. They refused to go. He went back alone and found it under a bush. He crushed its head with a stone and left the carcass to the flies that swarmed around the bloody altar flowers. (p. 18)

一撃で羊 (キリスト) を殺せなかったのはやはりキリストに対するとまどいであろう。そのことは、そのまま「ぎらぎらと照りつける日差しが、細長い影によって岩の祭壇をくっきりと浮かび出させている。何か暴力的なものを感じ、三人は逃げ出した。」という表現につながる。友人達が戻りたがらないので、Miss L. はひとりで石で羊の頭をたたきつぶすことになる。

しかし、だからといって Miss L. がキリストを否定したわけではない。彼は、キリストをダシにした christ business からのがれたいのだ。人生相談の仕事から身を引きたいだけなのである。その意味では、Miss L. はまだ逃げているといえよう。逃避できる場所など、ほんとうはないのを彼は

知っているのだが。

一度知ってしまった事実は、たとえどのようにして目をつむってしようとも、執拗についてまわる。冒頭の、どん底であえいでいる読者からの真摯なまでの訴えに、ひとたび耳をかたむけてしまった以上、それが Miss L. から離れることは、永久にない。

キリストを信じることができれば、それが逃避のひとつの手段になるだろう。あるいは信じるふりをするだけでもいいが、Miss L. にはそれさえもままならぬ。

If he could only believe in Christ, then adultery would be a sin, then everything would be simple and the letters extremely easy to answer.

The completeness of his failure drove him to the telephone. . . . (p. 46)

「もし彼がキリストを信じることさえできたら、不義をすることは罪になるのだし、ものごとはずべて簡単に解決する。人生相談の手紙の返事もなんということはない。しかし、彼のこの試みは完全に失敗し、彼は電話をかけに行った。」

このように葛藤するものの苛立ちが外に向けられると、それは「暴力」というかたちをとる。 (“he knew that only violence could make him supple” p. 20) あるいは、それは「狂気」のひとつの表れであるかもしれない。が、この作品にはもともと violence のイメージがつきまとう。そういった Miss L. の心のありようを端的に示しているのが、例えば次のような表現だ。

Miss Lonelyhearts felt as he had felt years before, when he had accidentally stepped on a small frog. Its spilled guts had filled him with pity, but when its suffering had become real to his senses, his pity had turned to rage and he had beaten it frantically until it was dead. (p. 30)

---

「Miss L. は、数年前うっかりして小さな蛙を踏んでしまった時のような感じにおそわれた。飛び出した内臓を見て、彼は憐れに思ったが、その苦痛が直接彼の感覚に伝わってくると、彼は狂ったように蛙が死ぬまで踏みつぶしたことがあった。」

「暴力」が「狂気」の表れとしてのかたちをとるなら、「秩序」への志向は、「正気」の状態での内部への沈潜である。

Miss Lonelyhearts found himself developing an almost insane sensitiveness to order. (p. 19)

「Miss L. は、秩序に対する自分の感覚が異常なほど鋭くなっているのに気がついた。」

Man has a tropism for order.....

Every order has within it the germ of destruction. All order is doomed, yet the battle is worth while....after these a circle, triangle, square, swastika. But nothing proved definitive and he began to make a gigantic cross. (p. 53-4)

「人間には、秩序に対する向性がある……すべての秩序は、その内に破壊の胚種をもっている。あらゆる秩序は運命が定められているのだ。しかし、それと闘うのも意味がないことではない。……それから円を、三角形を、正方形を、卍を（作ってみた。）だが、どれもきちんとした形にはならなかった。そこで彼は巨大な十字架をつくり始めた。」

何ひとつほどこしようなない現実の前には、だれしものが無力であろう。いわゆる「政治の季節」であり、大不況のさなかである1930年代というアメリカの暗部において、秩序を求めることは徒勞に近い。しかし、Miss L. は敗北を知りつつ闘いを挑む。

心労のために床についてしまった Miss L. は、それでも頭の中で、円、三角形、正方形、卍等の形をつくろうとする。が、どれも形が定まらない。このことは、もちろん秩序への試みのひとつであると同時に、全き自己実現への過程でもある。(4)

精神を冒されたものは、その傷を癒すために自然の中に帰ろうとする。だが Miss L. は、都市での生活を棄てることはできない。社会の中に身をおいて自然を希求しても、それが得られる時代はもう過ぎてしまった。

ウェストが次のように表現したとき、おそらく彼はエリオットの *The Waste Land* を意識している。公園内の描写である。

As far as he could discover, there were no signs of spring. The decay that covered the surface of the mottled ground was not the kind in which life generates. Last year, he remembered, May had failed to quicken these soiled fields. It had taken all the brutality of July to torture a few green spikes through the exhaustea dirt.

What the little park needed, even more than he did, was a drink. Neither alcohol nor rain would do. To-mor-row, in his column, he would ask Brokenhearted, Sick-of-it-all, Desperate, Disillusioned-with-tubercular-husband and the rest of his correspondents to come here and water the soil with their tears. Flowers would then spring up, flowers that smelled of feet. (p. 7)

「見られるかぎりでは、春の気配はなかった。まだらな地面をおおっている崩壊の影には、生命がよみがえる徴候はない。昨年の五月もこの汚れた大地はよみがえってはいなかったことを、彼は思い出した。疲れ果てた土からみどりの芽が出るのは、凶暴な七月になるだろう。

自分よりも、この小さな公園にこそ、液体が必要なのだ。しかしアルコールでも雨でもだめだろう。明日紙上で、悲しみにくれた女に、病める女に、絶望している娘に、結核の夫をかかえて途方にくれている女に、投稿してくれた人々に、ここへ来て涙をそそいでくれるように頼ん



---

でみよう。そうすれば、花が咲くかもしれない。脚のにおいのする花が。」

いうまでもなく、*The Waste Land* は第一次大戦後のヨーロッパ社会の不毛を嘆いた詩だが、春は訪れ、生命や復活のシンボルが数多くみられた。だが、ここでは春の兆しさもなく、「疲れ果てた土」に生命が芽ばえるには、七月の brutality, つまり violence が必要だという。さらに、*The Waste Land* では雨による「再生」への可能性が暗示されているが、ウエストの世界ではその雨も役に立たない。せめて Miss L. に手紙を出す人々の涙が、残されたただひとつの道だが、彼らの涙によって咲く花は、「脚のにおいがする。」それは、花というには価しない。「苦悩」という名の徒花であろう。絶望の根は、それだけ深い。「自然」による「再生」はない。極言すれば、次のひとことが全てを言い表わしている。

his (West's) novel is an answer to the optimism implicit in Eliot's vision of man and society.<sup>(5)</sup>

Miss L. の惨憺たる状態を見るにみかねた女友達 Betty が、彼を叔母の持つ農場へ引っぱりに行く。ここに、例の City 対 Country という図式が浮かび上がってくる。その結果はどうだろうか。

He got back to the house in time for lunch, and, after eating, they went for a walk in the woods. It was very sad under the trees. Although spring was advanced, in the deep shade there was nothing but death—rotten leaves, gray and white fungi, and over everything a funeral hush.

Later it grew very hot and they decided to go for a swim. They went in naked. The water was so cold that they could only stay in for a short time. They ran back to the house and took a quick drink of gin, then sat in a sunny spot on the kitchen porch. (p. 65-6)

「彼は昼食にまたあうように家へ戻った。食事をしてから、二人は森へ

散歩に出かけた。樹の下はひどく悲しげだった。春もかなり深まっているが、暗い日かげには死が漂っているだけだった——朽ちた木の葉、灰色や白い菌類があった。全てが葬儀のような静けさにおおわれていた。

しばらくすると、とても暑くなってきたので、泳ぎにゆくことにした。裸になって池に入ったが、水が冷たいためにわずかの間しかはいていられなかった。走って家に帰り、急いでジンを飲んだ。それから、台所のポーチの陽の当たるところに腰をおろした。」

この“Miss Lonelyhearts in the country”の章では、ほとんどが単なる事実の描写である。自然の風景によって、彼が心慰さめられることはない。ただ「死」の気配を感ずるにすぎない。水にもながくはいていられない。再び、「自然」による「救い」はない。

Miss L. の心の傷はいやされることはなかったが、ベティの誠意が通じたのか、彼の気持に変化がみられるようになる。

Several days later, they started to drive back to the city. When they reached the Bronx slums, Miss Lonelyhearts knew that Betty had failed to cure him and that he had been right when he had said that he could never forget the letters. He felt better, knowing this, because he had begun to think himself a faker and a fool. (p.68)

「数日後、ふたりは車で街へ帰ってきた。ブロンクスのスラム街へ着いたとき、Miss L. は、ベティが彼の病気を治せなかったこと、手紙を忘れることはどうしてもできないといったとき自分は間違っていたこと、を知った。そうわかってみると、気分が楽になった。なぜなら、彼は自分をサギ師として、道化として、考えはじめていた。」

The thing that made his share in it particularly bad was that he was capable of dreaming the Christ dream. He felt that he had failed at it,

---

not so much because of Shrike's jokes or his own self-doubt, but because of his lack of humility. (p. 68-9)

「彼がキリストの夢をみることができたばかりに、とくにひどい役割をおしつけられてしまった。彼が失敗したのは、シュライクの冗談とか、自分の懐疑心のせいではなく、謙虚さが足りなかったのだと、思った。」

Miss L. が、自分を *faker*, *fool* と見なしたことには、たぶんひらきなおりの気持ちがあるかもしれない。さらに一步すすんで、謙虚さの欠如を自分にあてはめてみる。己れの無力はしたたかに痛感している。キリストをもちだすまでもなく、人生相談の確乎たる回答などできはしない。それなら、苦悩にあえぐ相談者達の心をすべて受け入れてみることだ。解決策を考えずに、彼らと同じ平面上へと降りていって、そこに自らを立たせてみたらどうだろうか。

このような意識の転換は、必然的に対他者への態度を変えていく。再び、もぐり酒場でシュライクと会う。

The familiar jokes no longer had any effect on Miss Lonelyhearts. He smiled at Shrike as the saints are supposed to have smiled at those about to martyr them. (p.77)

「いつもの冗談は、もう Miss L. に効果はなかった。彼は、聖者が、彼らに殉じようとしている者たちに向かって微笑みかけるように、シュライクを見て微笑んだ。」

Miss Lonelyhearts was still smiling, but the character of his smile had changed. It had become full of sympathy and a little sad. (p. 79)

「Miss L. はいぜんとして微笑んでいたが、それは、以前とはちがう微笑みだった。そこには同情があふれ、いくぶんか悲しみも含まれていた。」

その酒場に、Peter Doyle というびっこの小男が Miss L. を訪ねてやって来る。Miss L. は、以前彼に相談をもちかけたドイルの妻と、関係していた。ドイルは、Miss L. に読んでもらいたくて、わざわざ手紙もってきていた。が、その内容は相も変わらずのものであった。しかし、Miss L. は手紙を読んでいて、偶然テーブルの下で触れ合ったドイルの手を、しっかりとにぎりしめるのである。

After finishing the letter, he did not let go, but pressed it(his hand) firmly with all the love he could manage. (p.82)

おそらくは普遍的な憐れみである「微笑」と、ドイルとの握手によって、Miss L. は勝利感を覚える。

Miss Lonelyhearts was very happy and inside of his head he was also calling on Christ. But his was not a curse, it was the shape of his joy. (p.83)

「Miss L. はとて幸福だった。頭の中では彼もまたキリストの名を呼んでいたが、それは呪いではなく、彼の喜びの表われただった。」

ようやくにして手に入れることのできたこの幸福感は、はたして真に希望に浸されたそれだろうか。ほんとうは、「死」という代償を払って得られた、束の間の、仮装された希望ではなかったか。

たとえ一時的にせよ、彼の心を満たした幸福感は、彼にいささかの自信を与えてくれたようだ。その自信が、rock (岩) となって表現されている。後半で多く用いられているこの「岩」のイメージは、もちろんキリストであるが、自己の象徴でもある<sup>(6)</sup>。

例えば、自分のアパートで眠っていた Miss L. の部屋に、酔ったシュラ

---

イクが入りこんできた時、

Miss Lonelyhearts stood quietly in the center of the room. Shrike dashed against him, but fell back, as a wave that dashes against an ancient rock, smooth with experience, falls back. There was no second wave. (p.90) (下線部は筆者)

「Miss L. は、部屋のまんなか立っていた。シュライクがぶっかってきた。ながい年月をへてなめらかになっている岩にぶかった波のように、うしろへ下がった。第二の波は、やって来なかった。」

あるいは、シュライクが Miss L. をからかおうとして、読者からの手紙の束をとりだした時、

The rock remained calm and solid. Although Miss Lonelyhearts did not doubt that it could withstand any test, he was willing to have it tried. (p.91)

「岩はいぜんとして落ち着いてがっちりしていた。この岩がどんな試験にもたえられるかどうかわからなかったが、Miss L. はよろこんで試してみようと思った。」

また、誘い出されたパーティの席上で、シュライクが読者からの相談の手紙をひとつずつみに紹介した時、

Miss Lonelyhearts stood it with the utmost serenity; he was not even interested. What goes on in the sea is of no interest to the rock. (p.93)

「Miss L. は、じつにおちついた気持でそれに耐えていた。興味さえ覚えなかった。海の中で起こっていることは、岩には関心がないものだ。」

〈MISS LONELYHEARTS HAS A RELIGIOUS EXPERIENCE〉

After a long night and morning, towards noon, Miss Lonelyhearts welcomed the arrival of the fever. It promised heat and mentally unmotivated violence. The promise was soon fulfilled; the rock became a furnace. (p.100)

「長い夜と朝がすぎて、昼に近いころ、Miss L. は、喜んで発熱を迎えた。それは、熱と精神的には動機のみつからない暴力を約束してくれる。約束はまもなく果たされ、岩は溶鉱炉となった。」

彼は岩となり、その岩は熱い塊りとなって溶けてゆく。十字架からはがして壁に打ちつけたキリストは、きらきら光るハエになってぐるぐると回っている。彼がキリストの名を叫ぶ。それが、彼の身体の奥底でこだまする。(Christ is life and light.)

He was conscious of two rhythms that were slowly becoming one. When they became one, his identification with God was complete. His heart was the one heart, the heart of God. And his brain was likewise God's.

God said, "Will you accept it, now?"

And he replied, "I accept, I accept."

He immediately began to plan a new life and his future conduct as Miss Lonelyhearts. He submitted drafts of his column to God and God approved them. God approved his every thought. (p.101)

「彼は、二つのリズムがゆっくりとひとつになってゆくの気づいた。ひとつになると、自分は神と一体であるということが完全になった。彼の心は神の心であり、彼の頭脳もまた神の頭脳である。

神は言った、『今、おまえはこれを受け入れるか?』

そして彼は答えた、『受けいれます。』

---

彼は、Miss L. としての、新しい生活とこれからの行動をすぐに計画し始めた。人生相談の原稿を神に委任した。神はそれを認めた。神は彼のあらゆる考えを認めた。」

そして、Miss L. はドイルの突然の訪問を受ける。玄関からゆっくりと階段をのぼってくる彼を、キリストと化した Miss L. は、彼に手紙を寄せる人々のひとりとして迎える。階段の途中でもみあっているうちに、ドイルのもっていたピストルが暴発して、ふたりは階段を転げ落ちて行く。

妻を乱暴されたと誤解したドイルに、Miss L. を殺す意志がほんとうにあったのかどうかわからないが、そのピストルの暴発というのは決して偶然ではない。それは、必然に支えられた偶然である。

旧約聖書の「創世記」第32章に、ヤコブの話がある。ヤコブは「神と人との争い」に勝ち、イスラエルと命名されたが、それは真に神の祝福だろうか。それなら、なぜびっこを引かなければならなかったのだろうか。

文明という力で、「神と人との争い」に勝ったはずのアメリカと、ながい放浪の末、その文明に頼らざるをえなかったユダヤ人、このふたつのイメージを、びっこの男ドイルに重ね合わせることができるかもしれない。

Miss L. (a spiritual cripple) は、ドイル (a cripple) と抱きあうようにして階段を転落して行く。彼はまた、アメリカという国の犠牲者としてアメリカと共に、文字通り *lonely heart* をいだきながら、奈落の底へと消えて行く。近代文明と人間性という、古くて新しいテーマがここにも顔を出す。(Miss L., Shrike ともにためいきまじりに言う、「humanity !」を思いおこすことができる)

と同時に、それは、*The Waste Land* にもその萌芽がみられた、都市内部での無限の彷徨への転落でもある。Miss L. の「死」によって幕が切れておとされ、そのままマラマッド、ペローといった現代アメリカユダヤ系作家につながるテーゼである。この作品に「ユダヤ性」を見いだすなら、おそらくここにしかない。(7)

我々に差し出され、不断に問われつづけなければならない Miss L. の

「死」。たとえ彼の死がなしくずしの「死」であろうと、「敗北」では決してない。そうではなくて、ただひとつの事実として受けとめることしか、我々には許されていない。ただ、それはアメリカの「死」でもあり、アメリカはそれ以後も死につづけている。

我々はそこに、「アメリカの夢」の終りと、アメリカにおける「無垢の終焉」をみる。

### Notes

- (1) Nathanael West: *Miss-Lonelyhearts* (edited with notes by Masao Shimura, Nan'un-Do, 1975) 以下同じ
- (2) James F. Light: "The Christ Dream," in *Twentieth Century Interpretations of Miss Lonelyhearts* (ed. by Thomas H. Jackson, Prentice-Hall, Inc., 1971), p. 26.
- (3) shrike (モズ) は、獲物を木の枝に突きさしておく習慣のある鳥であり、ここでは、Miss L. がその犠牲になっている。
- (4) 河合隼雄著「無意識の構造」(中公新書, 1977)によれば、マンダラとは、「一切の対立の統一を示し、陰と陽、天と地のあいだに包まれ、永遠の均衡と揺るぎない持続の状態を示している。」p. 169.
- (5) Edmond L. Volpe: *The Waste Land of Nathanael West* Notes (2) に同じ。p. 81.
- (6) ① 「自己の象徴として、自然物が選ばれること」がよくあり、その中でも石は、「自己の象徴としてよく出現する。」ユングの高弟フォン・フランツによると、「石は、たぶん、最も単純にして最も深い体験、つまり人間が不死で不変なものと感じる瞬間にもつことのできるような、何か永遠の体験、それを象徴している。」Notes (4) に同じ, p. 161.
- ② the Rock of ages (キリスト) という言葉があるが本文中にあげた引用文のなかの an ancient rock などは、まさにびったりの表現といえよう。
- (7) ① もちろん、シュライクにあやつられ、徒労にも近い努力をしている Miss L. に、シュレミール型道化の典型を見ることがもできるが、この作品では、それは重要なこととは思えない。(道化とすれば holy fool になる。) ② ユダヤ的なもの——都市——道化に関しては拙論参照、「現代アメリカ文学におけるユダヤ人の歪んだ笑い」「文学における笑い」(佐藤泰正編, 笠間書院, 1977) p. 205-225.